



The Pragmatics Society of Japan  
日本語用論学会

PSJ2018 CONFERENCE PROGRAM

第 21 回（2018 年度）大会

# 【発表要旨集】

— ABSTRACTS —

□12月1日（土）	
研究発表 1 / Oral Presentations 1 .....	1
ワークショップ 1,2 / Workshop 1,2 .....	2
研究発表 2-5 / Oral Presentations 2-5 .....	5
ポスター発表 / Poster Presentations .....	10
招待講演 / Plenary Lecture .....	12
□12月2日（日）	
研究発表 6-9 / Oral Presentations 6-9 .....	13

12月1日(土)

研究発表 1 / Oral Presentations 1 (10:00~11:55) 第1室 [F303]

1. アメリカ英語の談話における like の出現

塚本亜美 (新居浜工業高等専門学校)

発表者はアメリカ英語の談話において、特定のディスコースマーカ、like が多く使われることに着目している。ミスター・オー・コーパスという会話データの中に出現する like を抽出し、アメリカ人話者によるこの語用指標の使用にどのような特徴があるかを観察した。本発表では like が会話の中で出現する位置を例文を用いて解説する。また、動詞 said の代替語として機能する like の用例も挙げる。

参考文献：(1) Schiffrin, Deborah. 1988. "Discourse Markers." Cambridge University Press. (2) Fuller, Janet, M. 2003. "Use of the Discourse Marker Like in Interview." *Journal of Sociolinguistics* 7(3), 365-377.

2. 英語指示詞の非制限的用法について

孟鷹 (名古屋大学院生)

英語の指示詞 this・that (these・those) が限定詞として名詞句を修飾する際に、非制限的に用いられる場合が観察される。先行研究では、非制限的な this・that が感情的 (emotive or affective)・評価的 (evaluative) な解釈を受ける場合にしか容認されないと指摘されているが (Lakoff 1974 など)、(感情的に) 中立的・客観的な文脈における用例も存在する。本稿では、Diessel (1999) に基づき、指示詞を外部指示的 (exophoric)・照応的 (anaphoric)・認識的 (recognitional) という 3 種に分類したうえで、それぞれにおいて、this・that (these・those) が非制限的に用いられる現象を考察し、その機能を明らかにする。

参考文献：(1) Diessel, Holger. 1999. *Demonstratives: Form, Function, and Grammaticalization*. Amsterdam: John Benjamins. (2) Lakoff, Robin. 1974. "Remarks on 'this' and 'that'." In: *Proceedings of CLS 10*. pp. 345-356.

3. 段落末における which speaking of の諸特徴と機能

山内昇 (大同大学)

本発表では、次の (1) に示すような、段落末における which speaking of を非制限的関係節に起きた言語変化の一つとして位置づけ、その特徴と機能を考察する。

(1) [...] and actor Mark Hamill plays the part of the Trickster, a role he later reprised in the Justice League animated series. Which, speaking of... (<https://www.dccomics.com>)

A. 同表現は、小見出しにより節分けされたウェブ上の記事に散見され、主に節が切り変わる直前の段落に使用される。B. 前文から独立した形式で使用される傾向があり、後続段落には常に which の先行詞に関連する内容が展開される。C. of の目的語位置には具体的な語句が生起しない場合が多く、生起する場合には which の先行詞を明示的に示した語句が生起する。以上の特徴を踏まえ、段落末における同表現は、後続段落に展開される話題を which により予告し、speaking of により話題の転換を合図するという複合的な談話機能を担うと主張する。

参考文献：(1) 滝沢直宏. 2001. 「文外に先行詞をもつ関係代名詞 Which: 語彙と構文の相互依存性と談話的機能」『意味と形のインターフェイス (下巻)』 837-846. 東京: くろしお出版. (2) 山内昇. 2015. 「Speaking of の使用条件に関する記述的考察」『英語語法文法研究』第 22 号, 183-199.

## ワークショップ 1 / Workshop 1 (10:00~11:55) 第 2 室 [F309]

### ● 『相互行為』と語用論：社会的関係の動的性質に関する実践研究と教育への応用

オーガナイザー：竹田らら（東京電機大学）

本ワークショップの目的は、言語教育で語用論的側面を指導する必要性が増す（LoCastro 2012）中で、会話分析・談話分析からの相互行為研究や、日本語教育・英語教育への応用に関する研究を通じ、語用論的能力を高めて相互行為をより円滑に展開させる方法を模索することにある。これまで、語用論において、主な研究対象とはされてこなかった非言語要素（Clark 1996）や、個々の相互行為で創発されるコンテキスト（Mey 1995）などに目を向けることで、「相互行為において語用論とは何か」、また、会話分析・談話分析での知見から、「教育現場で語用論的側面をどのように指導したら良いか」について問題提起し、議論を深める。

各発表者からは、(1)言語・非言語要素から見る参与構造の変化、(2)沈黙が持つ意味、また、(3)協働作文活動での参与者同士の協調性や思考力、(4)協働作文活動と会話力の向上との関係を考察する研究が、話題として提供される。

参考文献：(1) LoCastro, V. 2012. *Pragmatics for Language Educators: A Sociolinguistic Perspective*. New York. (2) Clark, H. 1996. *Using Language*. Cambridge. (3) Mey, J. 1995. *Pragmatics: An Introduction*. Oxford.

#### 1. 三者間会話における参与構造の変化

小川洋介（神戸大学）

三者間会話においては、聞き手の参与承認の有無（Goffman 1981）や、コンテキストの情報の有無（Goodwin 1981）などにより、動的であり複雑なターン構造を呈している。本稿では、美容院での顧客、美容師、アシスタントによるマルチアクティビティの L2 三者間会話を会話分析の手法を用いて分析し、言語発話だけでなく視線移動や立ち位置などの物理的の行為も含め、参与者の行為と会話場面内の構造の動的な変化を考察する。相互行為の「周辺性」と「参与性」の視点から、第三者の自己参加が主参与者の自己排除を誘発している過程や、一名以上の発話者が承認される場面を明らかにし、マイクロ分析において三者間会話が瞬時に変化する二者間会話で構成されていることや、発信者不在の場面が存在することなどを提起する。

参考文献：Hindmarsh, J. (2010). Peripherality, participation and communities in practice: Examining the patients in dental training. In N. Llewellyn & J. Hindmarsh. (Eds.), *Organisation, Interaction and practice: Studies in ethnomethodology and conversation analysis*. (pp.218-240.) Cambridge.

#### 2. 沈黙の解釈に見られる多義性—会話参与者と研究者の比較を通して

種市瑛（横浜市立大学）

本研究は教育場面の沈黙を分析する基礎研究として、会話参与者 2 名と研究者（発表者）の沈黙の解釈について pragmatic act (Mey, 2001) の枠組みをもとに比較した。沈黙は音声に伴わないため、その行為者や働きが非常に曖昧であるが、沈黙に関する先行研究では、「話し手」の「意図」として捉えることが多い。だが Mey の枠組みにより、沈黙を実際の状況に即して捉えることが可能となる。本研究では対話データを収録し、研究者の解釈を明示するために談話分析を行った。また録画を見せながら会話状況について回顧インタビュー

し、会話参加者の解釈を分析した。その結果、それぞれの解釈者が沈黙に異なる意味付けをするだけでなく、同一解釈者が複数の解釈を提示する事例も示された。これらの解釈の多義性は、解釈者の立場や参照した視点に起因していると考えられる。

参考文献：Mey, J. L. (2001). *Pragmatics: An introduction* (2nd ed.). Oxford.

### 3. 外国人留学生と日本人学生によるリレー式作文協働作成活動における相互行為と学習効果

田辺和子（日本女子大学）

本研究は、4人の日本語教師が、日米4大学においてリレー式作文作成活動による「つながらる」能力の育成をテーマに行っている共同研究の一部である。

リレー式作文とは、複数の書き手によって1段落ごとに書き足しながら一つの物語を完成させる創作活動のひとつである。今回の発表は、日本語能力試験1級相当レベルの日本語学習者と日本人大学生とのグループでリレー式作文作成活動を行い、日本語学習者の日本語力向上にどのような効果をもたらすか、検証することを目的とした研究報告である。

実施方法としては、二つのグループ：①日本人1人と日本語学習者2人のグループ、②日本人2人と日本語学習者1人のグループを作り、リレー式作文を書いた。その結果、日本語学習者は、最終段落担当時において一番、日本人との協働作業の教育的効果が得られることが判明した。

注釈：＜共同研究者＞ 野口潔 [上智大学]・大須賀茂 [シートンホール大学]・岡田彩 [オクラホマ大学]

参考文献：當作靖彦（2013）『Nippon3.0の処方箋』東京。

### 4. 英語での会話力向上のためのチャット形式作文の導入と語用論的側面の指導

竹田らら（東京電機大学）

本研究では、コンテキストに応じた会話を促すべく、日本人英語学習者ペアによるチャット形式作文を導入した教授法を通じて、語用論的側面の指導法を考察する。人間関係を円滑にして内容を伝える観点からすると、日英語の談話構造の相違から英語での会話力向上に繋げる試みは道半ばであり、母語でのピア・インタラクションが英語作文の向上に貢献した（McDonough et al. 2016）との報告はあるが、作文教育が会話指導に貢献するかについては、管見の限り、研究されていない。

発表では、作文活動導入前に収録した会話とチャット形式作文の原稿を対象に、日本語話者交替からの転移度合と特徴を分析し、チャット形式作文で相互行為を可視化する指導が会話力の向上に寄与しうることを示す。さらに、コンテキストに応じた相互行為と話者交替の頻度との関係を念頭に、社会文化的状況や個人の表現選択に基づく事例を通じて、語用論的側面を指導する方法を提案する。

参考文献：McDonough, K., W. et al. 2016. “Thai EFL Learners’ Interaction during Collaborative Writing Tasks and Its Relationship to Text Quality.” In Sato, M. and S. Ballinger (eds.) *Peer Interaction and Second Language Learning: Pedagogical Potential and Research Agenda*, 185-208. Amsterdam.

## **ワークショップ 2 / Workshop 2 (10:00~11:55) 第3室 [F310]**

### ● 発話のはじめと終わり ～多様化する語用論的機能～

オーガナイザー：尾谷昌則（法政大学）

近年、注目を集めている「周辺部」は、話者による「語用論的な調節のなされる場所」（小野寺 2017）というだけでなく、しばしば文法化や構文化が起こる場としても注目されている。周辺部に生起するのは、いわゆる命題を包むモダリティ要素であり、これまでも多くの研究がなされてきたが、SNS 等の新しいコミュニケーション・スタイルの出現により、周辺部で使用される表現とその用法の多様化が進んでいる。そこで、本ワークショップでは、周辺部に見られるそういった新表現・新用法を取り上げ、語用論的な調節がますます多様化している現状について検討する。

参考文献：小野寺典子(編) 2017. 『発話のはじめと終わり 語用論的調節のなされる場所』東京：ひつじ書房

### 1. 接続詞化した「なので」の発話機能について

尾谷昌則（法政大学）

第一発表では、まず「周辺部」の先行研究を整理するとともに、新しく出現した表現（主にネット語）として「会社をクビになったンゴ」「可愛いかよ」「マジねむみ」「ってゆうか寒くない?」「ゆうて彼氏とかいないんですけどね。」などを紹介する。次に、発話のはじめに出現する接続詞「なので」を取り上げ、これが出現した当時（1960～80年代）は、聞き手に何らかの依頼をするような発話が後続する場合が多かったという事実から（データは国会会議録から採取）、聞き手に対して何らかの依頼もしくは要望を伝えることを予告する、一種のディスコース・マーカールになっていたと主張する。ただし、90年以降は用法が多様化し、後続文が必ずしも依頼文とは限られなくなったという事実も併せて提示する。

### 2. 付加型「言いさし文」の語用論的機能-完結させないやり方

大山隆子（北海道大学大学院）

第二発表では、最近、若い世代で観察される「泣いてないし。」のような「言いさし文」を取り上げる。接続助詞「し」の先行研究では「～し～し～」と連言接続での使用、または、「時間も遅いですし・・・」などの「婉曲用法」が知られているが、最近では、「し」単独で使用され、「婉曲用法」とも異なる。話し手は「泣いてない。」だけでも全てを言い尽しているが、あえて「し」を付加し、「聞き手との認識のずれ」を表す伝達態度を効果的に示していると本発表では主張する。また、聞き手は、「し。」で終わっていても、本来の「連言用法」の場合も考慮せねばならず、話者交替の場で、交替に戸惑う例も見られることから、話し手は、敢えて「言いさし文」にするという「完結させないやり方」で、会話の場における聞き手対応への柔軟性を高めていると主張する。

### 3. 接尾辞「～たん」の文末表現について

沈 雪君（法政大学大学院）

第三発表では、主に SNS における発話の終わりに使用される接尾辞「～たん」の文末表現について論じる。「～たん」は、本来は「みーたん」のような固有名詞に後接する接尾辞であるが、若者の間では「頑張るたん」や「つらたん」のように様々な表現に後接するようになった。そこで本発表は、このような文末の「～たん」について、①対人的モダリティの階層における位置づけと、②その語用論的機能の2点から考察する。①については、「～たん」は終助詞化されており、対人的モダリティ表現の一種になっているが、通常の終助詞とは異なり、「～たん」は話し手（書き手）の「かわいい」属性を表すのみであると主張する。②については、Twitter 上でのつぶやきは、読み手を意識して発言する傾向があるた

め、「～たん」を使用すると決めた書き手の意図が込められていると主張する。

## **研究発表 2 / Oral Presentations 2 (12:00~14:35) 第1室 [F303]**

### **1. 日本語の自他交替：協調の原理の観点から**

前田宏太郎（東京大学院生）

本発表の目的は、従来、語の意味の問題（影山，1996/2012 など）として扱われてきた日本語の自他交替現象が本質的には語用論的制約と世界知識によって説明される現象であることを示すことである。ここでは、制約として協調の原理（Grice, 1975/1989）を想定し、各格率が交替動詞の項の出現の仕方に関わっていることを明らかにする。動詞の意味はある事象についての世界知識を喚起するに過ぎず、原因項が必要か否か、つまり、自他形式のいずれかを決定するのは主に質・量・様態の格率の働きによると主張する。

参考文献：(1) Grice, H. P. (1975/1989). *Logic and conversation*. In Paul Grice (Ed), *Studies in the Way of Words*, (pp. 22-40). Cambridge, MA: Harvard University Press. (2) 影山太郎. (1996/2012). 『動詞意味論：言語と認知の接点』東京：くろしお出版。

### **2. ケド文の多義性の構造：「対比」および「参考情報の提示」を両極とする連続体モデル**

水田洋子（国際基督教大学）

日本語のケドが用いられる文(ケド文)には、逆接、前置き、終助詞的用法など多様な意味用法が見られるが、その多義性の構造は解明されていない。本研究では、ケド文の各意味用法は「対比」(X) および「参考情報の提示（参考までに当該の情報を提示する）」(Y) という要素を様々なバランスで持って連続的に分布している、という仮説を立て、この仮説を先行研究における例文やコーパスデータに適用してその妥当性を検証した。

参考文献：(1) 永田 良太・大浜 るい子. 2001. 「接続助詞ケドの用法間の関係について--発話場面に着目して」、『日本語教育』110、62-71. (2) 三枝令子. 2007. 「話し言葉における「が」「けど」類の用法」、『一橋大学留学生センター紀要』10、11-27. (3) 白川博之. 1996. 「「ケド」で言い終わる文」、『広島大学日本語教育学科紀要』6、9-17.

### **3. 直後の行為を拘束する発話行為 —終助詞ヨ・ネのふるまいの変化を例に—**

春日悠生（京都大学院生）

本発表の目的は、Searle (1975) によって提案された行為拘束型 (commissive) の発話行為を、拘束される行為が「いつ行われるべきものか」という観点から下位分類することである。本発表では、日本語共通語の終助詞ヨ・ネを用いた特定の発話が、「(話し手や聞き手の) 直後の行為を拘束する」ような発話行為となる際に、話し手や聞き手の知識状態と関連する形でそれらの終助詞のふるまいが変化する現象に注目する。また、日本語の命令文・依頼文における現象や、他の言語の現象においても、同じような発話行為の際に助詞などのふるまいが変化する例があることを指摘し、「(話し手や聞き手の) 直後の行為を拘束する」タイプの発話行為が、他の発話行為とは独立した 1 つの行為類型として立てうることを示す。

参考文献：(1) Searle, John R. 1975. A taxonomy of illocutionary acts. In Gunderson, Keith (ed.), *Language, Mind, and Knowledge*. 344-369. Minneapolis: University of Minnesota Press. (2) 井上優. 1993. 「発話における「タイミング考慮」と「矛盾考慮」：命令文・依頼文を例に」『研究報告集 (国立国語研究所報告)』14. 333-360.

#### 4. バラエティ番組の出演者のイメージ構築を図る表現行動の研究 —沢尻エリカ氏は本当にいい人になったのか—

金載勲（大阪大学院生）

日本では、不祥事を起こした芸能人が、バラエティ番組に続々と出演することでイメージの向上を図る場合がある。本発表では、過去、悪女のイメージができていたが、最近、イメージが良くなったと思われる俳優である沢尻エリカ氏が出演したバラエティ番組を中心に分析を行う。視聴者がバラエティ番組の面白さの裏に隠されているテレビ業界の意図に誘導される恐れがあることを踏まえてメディアリテラシーの観点から批判的にアプローチする。それによって、バラエティ番組で出演者のイメージ構築に用いられる談話構造と、それに伴う他の諸要素がどのような表現行動を構成しているのかを明らかにする。

参考文献：石井正彦・孫栄爽. 2013. 『マルチメディア・コーパス言語学—テレビ放送の計量的行動研究—』 大阪：大阪大学出版会.

### **研究発表 3 / Oral Presentations 3 (12:00~14:35) 第2室 [F309]**

#### 2. Sequential Incoherency in English Conversation: Focusing on the Appendor Question

Sally JONES (graduate student, Nagoya University)

This presentation will examine a practice of other-initiated repair in English conversation called the ‘appendor question’ and how they can address problems of sequential incoherency. The appendor question is an understanding check. It is a semantic and syntactic extension of the turn containing the trouble and it is produced by a different speaker. For instance, line 2 is an appendor question:

1 Roger: They make miserable coffee.

2\* Dan: Across the street?

3 Roger: Yeh.

Research on repair addressing problems of sequential incoherency in English has been limited (Sacks 1992; Drew 1997). The data for this research comes from 135 hours of naturally-occurring interaction in English. Comparing with another repair practice called ‘open-class repair initiators’, I will discuss the relationship between the degree of grasp of the trouble source and the degree of abruptness in the topic change.

(1) Drew, P. 1997. “‘Open’ class repair initiators in response to sequential sources of troubles in conversation.” *Journal of Pragmatics* 28(1), 69-101. (2) Sacks, H. 1992. *Lectures on conversation: Volume 1*. Oxford, United Kingdom: Blackwell.

#### 3. Rapport Management in Apologizing: From English Speech Acts Corpora

Toshihiko SUZUKI (Waseda University), Ami SATO (Otaru University of Commerce)

This presentation aims to demonstrate how “rapport management” (Spencer-Oatey, 2008) is represented by discourse politeness strategies for the speech event of “apologizing” in English. The presenters have conducted an analysis of the linguistic data obtained through questionnaire surveys and audio-visual recordings. The written and audio-visual conversation materials in this study were collected in the U.K. in August 2017 and March 2018 as part of the linguistic data for the corpus study of eight different English speech acts. The presenters maintain that rapport management strategies are functioning as an integral part in the exchanges of apologies and their replies. Applying the framework of rapport management (Spencer-Oatey, *ibid.*) to analyzing the utterances, the presenters found that (1) “apologizing” played a central role in management of sociality rights and obligations and (2) H tended to employ discourse politeness strategies to save S’s face when H was replying positively to S’s apologies.

References: (1) Spencer-Oatey, H. 2008. “Face, (Im)politeness and Rapport.” In H. Spencer-Oatey (Ed.), *Culturally speaking: Culture, communication and politeness theory* (2nd ed., pp.11-47). London/New York: Continuum.

#### 4. Please smile when you nod: The use of smile in backchannel sequences

Saya IKE (Sugiyama Jogakuen University), Jean MULDER (University of Melbourne)  
Analysing the intra-cultural conversations of four Japanese English (JE) pairs and four Australian English (AusE) pairs from a six-hour corpus of dyadic conversations, that have been transcribed for speech and gesture, we focus on the role of smile in interaction. By identifying the location of smile and analysing its functions, both as a backchannel cue and a backchannel element, we provide a close examination of its use within extended backchannel sequences. While Kogure (2007) suggests smile is used as a silence filler in backchannel sequences in Japanese, our analysis indicates that smile plays an important role in collaborative stancetaking and rapport enhancement in JE conversations. Furthermore, comparison of the use of smile in backchannel sequences in JE and AusE emphasises the orientation differences that have been suggested in our earlier investigations (Ike & Mulder, 2018), and extends our understanding of backchannel behaviour in these two varieties of English.

References: Ike, S. & Mulder, J. (2018). Rapport-oriented vs. Stance-oriented Backchannel Sequences in ELF Interactions. *Proceedings of the 20th Annual Conference of Pragmatics Society of Japan*. Kyoto. 191-198. Kogure, M. (2007). Nodding and smiling in silence during the loop sequence of backchannels in Japanese conversation. *Journal of Pragmatics*, 39(7), 1275-1289.

### **研究発表 4 / Oral Presentations 4 (12:00~14:35) 第3室 [F310]**

#### 1. 日中語母語話者の「否定的評価」に関する対照研究—談話完成テストの分析を中心に— 儲葉明（筑波大学院生）

本発表は、DCT（Discourse Completion Test、略:DCT）談話完成テスト及びカイ二乗検定を用い、日常的な場面で逸脱した行動をした相手に対し、日本語と中国語の母語話者がいかに否定的評価を行うか、否定的評価の仕方がどのように異なるのかをポライトネス理論に基づいた分析を行った。

具体的には、逸脱した行動をした相手に対して、日本人はオン・レコードの意味公式である「批判」と、一部がポジティブ・ポライトネス・ストラテジーの意味公式である「緩和」の多用が考察された。一方、中国人はポジティブ・ポライトネス・ストラテジーとオフ・レコードが両方解釈可能である意味公式「冗談/皮肉/からかい」の多用が明らかになった。

このように、今迄ネガティブ・ポライトネス・ストラテジーを選好すると言われてきた日本人（母 2002）の異なる側面が観察された。なお、中国人の「冗談/皮肉/からかい」のような複合的なポライトネス・ストラテジーの使用も注目される。

参考文献：(1)母育新.2002.「ポジティブ・ポライトネスから見た日中の比較—日本語教育の視点からの考察—」

#### 2. 断り発話の構成要素に関する日中対照研究—認知とポライトネスの接点から

高揚（筑波大学院生）

本稿では、談話完成テスト（DCT）により収集した断り発話の言語表現を文化—<ポライトネス>と関連させながら、認知—<視点配置>というアプローチから分析を行った。分析結果に基づき、これまでの「断り」に関する研究では着目されてこなかった認知とポライトネスの接点から、日中間の配慮の仕方の相違と認知レベルでの営みとの関連性を検討した。

断り発話に現れるポライトネスや配慮の示し方が、日中両言語の間においては異なるように見えるが、その背後において、日本語話者は事態内部に入り込んで主体的に把握する

様式—<自己中心的視点状況>、中国語話者は当該事態の外から客観的に把握する様式—<最適視点状況>といった認知レベルの差異が、異なる言語表現や配慮の仕方を導く要因であることが明らかとなった。

参考文献：(1) 清水啓子. 2010. 「言語表現における主観性」『Language issues』16(1), pp.1-12.  
(2) Langacker, Ronald. W. 1985. Observations and speculations on subjectivity. In J. Haiman (ed.), *Iconicity in Syntax*. John Benjamins.

### 3. 発話の中の聞き手指示方法の選択に関する語用論的分析—「あなた」と「固有名詞」との選択を中心に—

都賢娥（北海道大学院生）

本発表では、日本語の発話の中で聞き手を指示する方法として、対称詞の「あなた」と聞き手の名前、つまり「固有名詞」が両方とも使用できる話し手が、どちらかを選択することによって発生する発話効果について、Brown&Levinson(1987)のポライトネス理論に基づいて分析する。具体的には、本来、敬称として使われた「あなた」が、その敬意は失ったが、形式性だけが残存している点から、「あなた」が遠隔化の機能を持つと捉え、発話場面によって「あなた」が配慮表現として使われる場合があることを明らかにする。また、発話場面については、聞き手のFaceに触れる、つまりFTA(Face Threatening Act)になる可能性がある場合での「あなた」と「固有名詞」における選択が、どのような発話効果を発生させるかについて、用例をもとに分析する。

参考文献：Brown Penelope and Stephen C. Levinson. 1987. *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge University Press.

### 4. 呼びかけと項の連続性—落語に見られる対称人称詞を例に—

東出朋（国立釜慶大学校）

本発表の主眼は、項は命題との関わりにおいて連続性を帯びているという林・水口・小川（2005）の呼びかけ詞の「連続体仮説」について、対称人称詞が無助詞で頻繁に出現する落語を資料として具体例を分析し、その主張の妥当性を再検討するものである。連続体仮説では、まずその呼びかけ詞が述語の項として解釈できるか否かという観点が重要で、述語の項でない場合は「呼びかけ」や「強調」という心的発話行為を行っているとし、A型からD型に分類した。確かにこの仮説は「あんた」という同じ形式が自然談話で多様な振る舞いをするという事実を包括的に説明できるというメリットはあるが、しかし、実例を観察するとこの分類にはいくつかの疑問点が残されている。そこで、まずこの仮説に残される問題点を指摘し、述語の項か否かという観点と関連して、出現位置も重要であることを指摘する。

参考文献：林博司・水口志乃扶・小川暁夫. 2005. 「項の「文的」解釈と「発話的」解釈—呼びかけ詞の対称言語学的考察」串田秀也・定延利之・伝康晴（編）『活動としての文と発話』ひつじ書房

## **研究発表 5 / Oral Presentations 5 (12:00~14:35) 第4室 [F311]**

### 1. 相互行為場面の研究で用いられる指示詞の記述—分野間の交流を目指して—

平田未季（北海道大学）

近年、分析技術の発達および相互行為場面分析の理論的枠組の発展により、詳細な文脈情報を取り入れた指示行為（referential practice）の研究が数多く行われている。指示行為の

中で、最も頻繁に用いられる言語表現は指示詞である。日本語指示詞は 1930 年代に遡る豊かな研究の伝統を持つが、指示行為の研究では、指示詞の記述が指示詞研究の文脈と切り離されている。一方、日本語指示詞研究では、90 年代以降現場指示の分析は完了したというムードがあり、実際のやりとりに基づく研究がほとんどない。指示行為の研究が蓄積する興味深い現象の記述を、指示詞研究の文脈に位置付けることで、先行する指示詞分析の枠組の批判的検討とその更新が期待できる。また、会話参加者の共有知識である文脈普遍的な指示詞の意味は、指示達成のため用いられる重要なリソースである。現場の知見に基づき指示詞の意味を再分析することは、指示行為分析のための概念的基盤を提供しうると思われる。

## 2. 引用動詞の省略に関する一考察—省略から文法化へ

尹盛熙（関西学院大学）

本発表の目的は、現代日本語における省略と文法化の関連性を具体的な事例から検証し、文法化という言語変化における省略の役割について考察することである。具体的には、様々なテキストから「述語において省略が起きやすい」という日本語の傾向に基づき、引用動詞「いう」とその関連表現の省略様相を観察する。「いう」に関しては、本来の意味が薄れて機能語に近づくという文法化の傾向が指摘されてきたが（砂川 2006）、「いう」及び関連表現における省略の様相と用法変化などの実例を観察し、省略が文法化の第一歩として重要な役割を果たしていることを確認する。このことは、言語構造的に日本語との類似点が多いながらも、日本語に比べて文法化が進んでいないとされる韓国語（堀江・パルデシ 2009、塚本 2012）では述語の省略が起きにくいことから裏付けられる。

参考文献：(1) 砂川有里子. 2006. 「言う」を用いた複合辞—文法化の重層性に着目して— 藤田・山崎編 (2006) 『複合辞研究の現在』. 和泉書院. (2) 堀江薫・プラシャント・パルデシ. 2009. 「第 2 章 認知類型論の観点から見た構文の連続性」『認知言語学のフロンティア 5 言語のタイポロジー』, 研究社. (3) 塚本秀樹. 2012. 『形態論と統語論の相互作用』東京：ひつじ書房.

## 3. インターネットスラングにおける意味変化—新規表現「耐え」を中心に—

林智昭（近畿大学）、松浦光（横浜国立大学）

本発表では、動詞「耐える」が二格を取らず、「単位が落ちそうなところを持ち堪えた」を初めとする意味を持つようになった「耐え」の用法を意味変化の観点から共時的・通時的に論じる。インターネット上では、「盛る」（神澤 2012）、「つらみ」（宇野 2015）のように、ある種の破格的な形式をもつ言語現象が観察され、その一例に「耐え」を位置づける。まず、言語記述として、twitter を一種の通時コーパスと見なし、この種の用法が 2011 年頃より観察されること、「耐えー」は 2013 年頃、「耐え耐え」は 2015 年頃に「単位耐え」の意味で使用されるようになったことを指摘する。次に、共時的観点から、日本語話者への調査により使用者層の中心が大学生世代にあるとの見通しを立てる。最後に、この種の「耐え」の背後にある新奇な概念レベルのメタファーとして「テストは RPG ゲーム」を提唱する。

参考文献：(1) 神澤克徳. 2012. 「若者ことばにおける『盛る（もる）』の意味拡張」『日本語用論学会第 14 回大会発表論文集』41-48. (2) Lakoff, G. and M. Johnson. 1980. *Metaphors We Live By*. Chicago: University of Chicago Press. (3) 鍋島弘治朗. 2016. 『メタファーと身体性』ひつじ書房. (4) 宇野和. 2015. 「Twitter における『新しいミ形』」『国文』第 123 号, 106-94. (3)

#### 4. メディアなどで見られる拡張的な連体修飾表現の分析：主観性と間主観性の観点から 神澤克徳（京都工芸繊維大学）

近年、SNS やテレビ番組等において、通常の連体修飾とは異なる特徴をもつ「～問題」という連体修飾表現をしばしば目にする。連体修飾や若者ことばに関する研究は数多く行われているが、この表現について扱ったものは発表者の知る限り存在しない。本発表では、一般的な連体修飾表現との差異を中心に、この表現に見られる特徴を明らかにすることを目的とする。具体的には、この表現は、通常の連体修飾節とはプロソディーが異なる、「すぎ」や「すぎる」と共起しやすい、助詞の脱落が頻繁に生じるなどの特徴をもつ。さらに、一部の表現では、Traugott (1982, 1988, 2003) の主観性 (subjectification) と間主観性 (intersubjectification) が反映されていることを明らかにする。

参考文献：(1) Traugott, E.C. 2003. "From Subjectification to Intersubjectification." In: Raymond Hickey (ed.) *Motives for Language Change*. 124-139. Cambridge.

### ポスター発表 / Poster Presentations (14:35~15:35)

#### ポスター発表会場 [F 棟 3 階ロビー]

##### 1. Figurative Expressions は連鎖の中でどう使われるか～話題転換における役割～

木野緑（早稲田大学ほか）

本発表は、figurative expressions（以下「FEs」）が相互行為の連鎖の中で、話題転換にどういった役割を果たすのか会話分析の手法を使って明らかにする。特に日常的に使われ、広く認知されている「語レベル」のFEs（「かんづめ」など）は要約・評価の機能があり、話題転換や話題を展開・継続する際のピボットとして発話に組み込まれていることが観察された。さらにFEsと字義的表現（literal expressions）が自発話内であるいは相手話者とのやり取りで使い分けられ、より理解可能性を高めると同時にFEsの間接性が故に相手の気持ちを配慮できる手段と成り得ることが示唆できる。

参考文献：(1) Drew, P. and Holt, E. 1998. "Figures of speech: Figurative expressions and the management of topic transition in conversation." *Language in Society* 27 (4), 495-522. (2) Holt, E. and Drew, P. 2005. "Figurative Pivots: The use of figurative expressions in pivotal topic transitions." *Research on Language and Social Interaction* 38 (1), 35-61.

##### 2. 日本人はどのようにユーモアを語るか—「わたしのちょっと面白い話コンテスト」からみた語りの構造—

張洋子（東京外国語大学院生）

文化に関わらず、人が気持ちよく交流する際に使われる手段の1つとしてユーモアが挙げられる。本発表は、異種の組み合わせによる不適合が笑いを生起させると指摘している「不適合理論」を取り上げながら、「わたしのちょっと面白い話コンテスト」の中から抽出した日本人による220作品を分析データとし、話の「対象」、「形式」、「構造」について分析を行った。投稿作品の中、他人を笑う話が全体の半分近くを占め、そして個人体験談などのナラティブの形式が多く観察された。また、構造については、パンチラインで話を終わらせるジョークと異なり、ナラティブではパンチラインが終わった後でも情報を続けて提供している作品が多いことが分かった。

参考文献：(1) Attardo, S. 2001. *Humorous texts: a semantic and pragmatic analysis*. De Gruyter Mouton. (2) Labov, W. 1972. *Language in the Inner City: Studies in the Black English Vernacular*.

### 3. 日本語の雑談における物語の談話構造

張未未（早稲田大学院生）

本発表の目的は、日本語母語場面と日中接触場面の雑談における物語の談話構造を解明することにある。具体的には、物語の「中心発話」とその位置に基づく「話段型」に着眼し、物語の雑談における文脈上の機能を考察した。その結果、母語場面では、日本語母語話者は物語の中心を表す評価が話題の最後に来ることが多いが、評価を物語の途中から様々な角度から交わしながら話題を進展させていくことも多いことがわかった。一方、接触場面では、中国人日本語学習者は物語の要点を先に述べて、それを例証するような形で物語を語るのに対して、日本語母語話者は、学習者の物語の結論や主張を補完する形で最後に評価を付け加える傾向が窺える。

参考文献：(1) Labov, W. 1972. *Language in the Inner City*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press. (2) 李麗燕. 2000. 『日本語母語話者の雑談における「物語」の研究—会話管理の観点から—』くろしお出版. (3) 佐久間まゆみ. 1995. 「中心文の『段』統括機能」. 『日本女子大学紀要 文学部』44. 93-109.

### 4. 「虚辞 + COME」存在文の類型論的調査 ～動詞にかかる制限と意味上の主語の意味タイプの関連性に関して～

三野貴志（大阪大学院生），芝田思郎（大阪大学院生），服部拓哉（大阪大学院生）

本研究では、虚辞を伴う存在文における類型論的調査を行い、各言語の存在文の動詞にかかる制限と意味上の主語の選択の関連性を指摘する。具体的には英語、フランス語、スウェーデン語、ノルウェー語、ドイツ語、オランダ語の6つの言語における虚辞を伴う存在文において、英語の *come* と対応する動詞と共起する表現の振る舞いの違いを、どのような意味上の主語を伴うかを基に検討する。結論としては、存在や出現に動詞が制限されている英語とフランス語が他の言語と比べて抽象名詞（特に時間名詞）が多く生起することから、動詞に厳しい制限が課せられる言語は *come* の意味が制限され、主語に抽象名詞を好み具体的な移動を表しづらいついた虚辞構文の特徴を明らかにする。

参考文献：(1) Breivik, Leiv E. 1990. *Existential There: A Synchronic and Diachronic Study* (2nd ed.). Oslo: Novus Press. (2) Pfenninger, Simone E. 2009. *Grammaticalization Paths of English and High German Existential Constructions*. Bern: Peter Lang.

### 5. プロトタイプ義と語用の意味対称

西内沙恵（国立国語研究所）

多義語の意味は、どのような条件で表出しているのか。文脈情報のほか、文法的な要素も意味の推測に大きく寄与するとされ、中心義と派生義の関係の解明とともに曖昧性解消のプロセスが明らかにされてきた。意味情報を付与した現代書き言葉均衡コーパス（加藤ほか2018）から、50の多義的形容詞の用例を抽出し、分類語彙表・日本国語大辞典・用法別の情報を比較したところ、プロトタイプ性の判断にずれが観察された。本研究では、これらの用例について(A)言語学的なプロトタイプ義と、(B)実際の運用において表出しやすい意味が、どのように異なっているのかを感動文を手がかりに調べる。共起語などの意味特定の言語的手がかりがない感動文における多義の表出の仕方から、①多義のいずれの意味もが平等に選択の可能性を待つわけではないこと、②派生義であっても、意味の性質によって意味特定の優位に立つことを示す。

参考文献：加藤祥・浅原正幸・山崎誠 (2018) 『『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の新聞・書籍・雑誌データに対する分類語彙表番号付与』『日本語学会 2018 年度秋季大会予稿集』

## 6. 人はことばによっていかに傷つくか—ディスコーダンスの観点から

中川佳保 (大阪大学大学院生)

本発表では、話し手には聞き手を傷つける意図はなかったと思われるにもかかわらず、話し手の発話によって聞き手が傷ついてしまった場合、なぜそのような現象が起こってしまうのかを、武黒(2018)で提唱されているディスコーダンスという概念を用いて説明することを試みる。日本映画から収集された事例の分析を通じて、そのような現象が起こる要因として、二種類のディスコーダンス現象を提示する。一つは、発話産出の際に話し手が想定していたコンテキストと発話解釈の際に聞き手が参照したコンテキストの間に不一致があるというコンテキストの不一致、もう一つは、聞き手が参照したコンテキストが聞き手の否定的評価につながるというコンテキストが聞き手にもたらす不調和である。

参考文献：武黒麻紀子. 2018. 『相互行為におけるディスコーダンス—言語人類学からみた不一致・不調和・葛藤』. 東京.

## 招待講演 / Plenary Lecture (16:10~17:40) 第2室 [F309]

### 伝達意図とアドレス性

伝康晴 (千葉大学/国立国語研究所)

グライスは「話し手はある信念を抱かせようという意図とともに、しかもその意図を認識させることによってその信念を抱かせようという意図とともに、その発話を行なった」という 2 段階の意図によって、話し手の意味を定式化した。関連性理論はこれを伝達の理論として発展させ、2 段階目の意図を「話し手が情報意図 (=1 段階目の意図) を持っていることを聞き手との間で相互に顕在化する」という伝達意図として定式化した。語用論におけるコミュニケーション研究はながらく、このような 2 段階の意図が伴うような状況を対象としてきた。これらの理論は、発話や意図明示的刺激が特定の聞き手に宛てられる状況を前提としている。しかし、多人数が参与する日常場面の会話では、必ずしも発話を直接宛てられていない聞き手が直前の発話に反応したり、そのような第三者の反応がそもそも期待されていたとみなせたりする場面がしばしばある。

本発表では、発表者が近年取り組んでいる、日常会話コーパスや格闘技練習・祭りの準備のフィールドデータなどからの事例を援用し、多人数会話におけるアドレス性の観点からコミュニケーション研究での伝達意図の位置付けを再考する。

12月2日(日)

研究発表 6 / Oral Presentations 6 (9:50~11:45) 第1室 [F303]

1. ‘¬p, I (don’ t) {think/believe}’ における挿入節 I (don’ t) {think/believe} の語用論的機能

森貞 (国立福井工業高等専門学校)

本発表の目的は、‘¬p, I (don’ t) {think/believe}’ における挿入節 I {think/believe} 及び I don’ t {think/believe} の語用論的機能を明らかにすることである。本発表では、複数の大規模コーパス検索による当該表現の出現割合及び出現状況の詳細な観察結果を提示し、先行研究における捉え方と異なり、I don’ t {think/believe} (「無標」の表現) は【¬p の主張を緩和する (¬p の真実性に対する確信度の低さを表示する)】機能を有する一方で、I {think/believe} (「有標」の表現) は【¬p が個人 (話者) の見解であることを強調する (『あくまでも個人の見解 (主観的意見) であり、他者に認められなくても良い』ことを伝える)】機能を有していることを主張する。両用法 (機能) とも、「聴者への丁寧さ」の意識が背後に存在するが、後者は、「¬p の真実性に対する高い確信度」を維持しつつ、丁寧さを示そうとする場合に用いられることを実例 (高い確信度を示す副詞類との共起) の観察を通して主張する。  
参考文献：(1) Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman. (2) 荒木一雄・安井 稔 (編) (1992) 『現代英文法辞典』三省堂。

2. 表意に貢献しない概念 : the other way (a)round の場合

黒川尚彦 (大阪工業大学)

本発表では、The women choose their husbands, not the other way around. のような発話における the other way (a)round を例にとり、次の5点を論じる。①the other way (a)round は、Some people might say advertising reflects society, but I think it can be the other way round. のような場合と同様に、先の例でも概念的と考えられる。②先の例で the other way (a)round は、これ自体が否定されるのではなく、これが指し示す命題内容が否定されることから、表意への貢献は直接的ではない。③指し示す命題内容が得られなければ発話の真偽判断が不可能となることから、当該表現は間接的に表意に貢献する。④関連性理論では概念的意味を有する語は表意に貢献すると考えられてきたが、当該表現はこれに当てはまらない。⑤これまで表意は一義化、飽和、自由拡充、アドホック概念構築という語用論のプロセスを通じて得られると考えられてきたが、当該表現の間接的な表意への貢献は、4つとは異なるプロセスを仮定する必要がある。

参考文献：(1) Sperber, D. and D. Wilson 1986/1995. *Relevance: Communication and Cognition*. Oxford: Blackwell. (2) Carston, R. 2002. *Thoughts and Utterances: The Pragmatics of Explicit Communication*. Oxford: Blackwell. (3) Iten, C. 2005. *Linguistic Meaning, Truth Conditions and Relevance: The Case of Concessives*. Basingstoke: Palgrave.

3. 糖尿病にみる多様な想定に対応した臨床での説明 —関連性理論の観点から—

神田千春 (上武大学/群馬大学)

本発表では、患者の持つ疾患に関する百科事典的知識が多様な想定 (思い込み) を派生させ、臨床での説明に対する解釈と治療プロセスに影響を与える事を、Sperber & Wilson (1995) で提案された関連性理論の枠組みで明らかにすることを試みる。臨床での説明を通して医療者がイメージする患者の理解と、実際に患者が説明を解釈して抱く理解との間にはギャ

ップが生じやすい。その要因の 1 つに、身近な人々の様々な病態を見聞きした経験が患者の想定に影響することが挙げられる。患者にとって認知効果のある説明には、患者の心的状況による認知力を推察するとともに、疾患に対するコンテクスト的想定とその正誤、および強弱を把握して、それらに対応させた説明が求められるのである。臨床の場という限定された領域での医療用語を用いた説明について、糖尿病に関する医療者－患者間の会話例の分析を通して、患者の視点から考察していく。

参考文献：(1) Sperber, D. and Deirdre Wilson.1995. *Relevance: Communication and Cognition*, Second Edition. Oxford: Blackwell. (2) 今井邦彦 (編). 2009. 井門・他(訳).『最新語用論入門 12 章』. 東京. (3) 国立国語研究所. 2009.『病院の言葉を分かりやすく－工夫の提案－』. 東京.

## **研究発表 7 / Oral Presentations 7 (9:50~11:45) 第 2 室 [F309]**

### **1. Onomatopoeia, Telop and Relevance: Making meaning more determinate**

Ryoko SASAMOTO (Dublin City University)

This study is concerned with the relationship between visual and verbal inputs, with a particular focus on telop and onomatopoeia. A range of examples will be examined in terms of the showing and meaning continuum and the determinate-indeterminate continuum. At the determinate end of the continuum, the speaker's meaning is fully determinate while at the other end of the continuum, the speaker's meaning is so indeterminate that it amounts only to the communication of impressions. On the other hand, in a typical showing case, the speaker provides direct evidence to communication, while in a typical case of meaning, the speaker provides indirect evidence to communication. Telop and onomatopoeia typically involve both showing and meaning and function as the bridge between verbal and nonverbal elements on TV. That is, telop and onomatopoeia contribute to utterance interpretation by making the meaning more determinate and thus helping viewers to recover the intended interpretation.

References:

Sperber, D and Wilson, D (2015) "Beyond speaker's meaning". *Croatian Journal of Philosophy* XV (44), 117-149.

### **2. The Cultural Construction of the Self Affecting Figure-Ground Reversal**

Yusuke SUGAYA (Mie University)

The purpose of the present study is to elucidate cultural differences in the cognitive process of Figure-Ground (F-G) reversal, which is assumed to arise from the distinction between the interpretation of self and movement of perspective. Linguistic expressions to be handled here are twofold: (i) expressions of motion events, in particular, concerning time- and place-moving metaphors and (ii) expressions of change of state that involve dimensional adjectives. Based on the assumption that F-G reversal may refer to the extent to which one subjectively or objectively conceives an object, our experimental survey strives to discover and demonstrate distinguished features according to language societies. This is done by means of examining the usage of such expressions in English and Japanese in a wide variety of manipulated conditions.

References: (1) Kitayama, Shinobu. 1991. *Self and Emotion: A Cultural psychological view*. Tokyo: Kyouritsu Shuppan. (2) Sugaya, Yusuke. 2017. The Cognitive Process of Objectivization in Different Cultures: A Japanese/English Comparison. *Papers in Linguistic Science* 23: 83-105. (3) Talmy, Leonard. 2000. *Toward a Cognitive Semantics: Volume 1, Concepts Structuring Systems*. Cambridge: MIT Press.

### **3. 社会的迷惑行為の認知と注意行動に対する背景諸要因 —社会的合意と日本語学習による逆行転移に着目して—**

林炫情（山口県立大学）、玉岡賀津雄（名古屋大学）、ジャミラ・モハマド（マラヤ大学）

迷惑行為は、「迷惑者が自己の欲求充足を第一に考えることによって、結果として他者に不快な感情を生起させること、またはその行為」と定義されている（吉田他編, 2009）。本研究では、日本（J）・韓国（K）・中国（C）・マレーシア（M）の4つの言語およびそれぞれを母語とする日本語学習者を対象に、第1および第2言語使用の場面での迷惑行為の認知（迷惑度）と注意行動に影響する背景諸要因を検討した。具体的には、(1)さまざまな迷惑行為に対する迷惑度と相手に注意をするかどうかは J・K・C・M でどの程度異なるか。(2)日本人を基準とした場合、日本語を学習した体験が、韓国人日本語学習者（KJ）・中国人日本語学習者（CJ）・マレーシア人日本語学習者（MJ）の迷惑度と注意行動の有無にどう影響するのかを明らかにした。

参考文献：吉田俊和・斎藤和志・北折充隆編. 2009. 『社会的迷惑の心理学』ナカニシヤ出版.

## **研究発表 8 / Oral Presentations 8 (9:50~11:45) 第3室 [F310]**

### **1. 共同発話に見る日本語母語話者の「言語ホスト性」 —接触場面における三者間課題達成談話の分析から—**

ツオイ・エカテリーナ（東洋大学）

本発表は、Fan(1994)が提示した「言語ホスト(linguistic host)」という概念を借用し、接触場面における日本語母語話者と日本語非母語話者の言語行動の違いを「言語ホスト性」として検討したものである。具体的には、分析データとして接触場面における三者間課題達成談話を用い、日本語母語話者同士間の共同発話と日本語母語話者非母語話者間の共同発話の相違を分析した。分析方法として、談話における共同発話の生起位置および先行発話に対する後行発話の生起位置に着目し、母語話者と非母語話者の相互行為の相違点について比較検討を行った。

参考文献：(1) Fan, S.K. 1994. "Contact situations and language management." *Multilingua*, 13(3), 237-252. (2) Hayashi, M. 2003. *Joint utterance construction in Japanese conversation*. Amsterdam: John Benjamins.

### **2. 会話におけるトラブルの責任の所在を示す相互行為的ストラテジー —他者開始・自己実行の修復で利用される「だから」を例に—**

中馬隼人（名古屋大学院生）

本研究は、他者による修復開始に対して修復の自己実行が行われる際に、ターン開始要素として使われる「だから」がどのような相互行為のために利用されているかを、会話分析の手法を用いて明らかにするものである。具体的には次の通り。話し手がある発話をする際に、何らかの（主に理解の）トラブルに直面した聞き手によって他者修復が開始される。それに対して、修復開始を受けた話し手が修復を（自己）実行する。このときに起こったトラブルの責任（Robinson 2006, Kushida 2011）の所在がトラブル源の産出者ではなく、修復開始者にあることを遡及的に示すために、修復実行者がターン冒頭の位置で「だから」を利用していることについて論じる。加えて、「だから」を含む修復の実行が、トラブル源となっている情報は既に共有済みであるというスタンスの表示等の、相互行為における様々な課題の解決のために用いられていることを示す。

参考文献：(1) Robinson, J. D. 2006. "Managing Trouble Responsibility and Relationships during Conversational Repair." *Communication Monographs* 73 (2), 137-161.

### 3. 疑問表現に対する疑問表現での応答をめぐる語用論的考察

馬穎瑞 (重慶大学外国語学院)

本発表は疑問表現による「質問-質問」と「依頼-拒絶」というタイプを「質問-応答」という基本的な隣接ペアから逸脱したものとして捉え、会話データにおけるこのような逸脱したタイプの発話の連鎖を観察し、状況文脈・形式文脈・知識文脈を用いて、それらが存在する合理性と特徴を語用論的に検討する。その結果、①第一発話者と知識状態が異なっている場合、第二発話者が疑問表現を用いて第一発話者の質問に応答する。それは自分が情報を持たないため、質問を解明できないことを表し、相手から情報を求めるのである。このように、疑問表現による「質問-質問」の隣接ペアが生じる。②疑問表現による「依頼-拒絶」の隣接ペアに、拒絶を表す場合に使われた疑問表現が拒絶の機能を発揮しながら、アドバイスを提示する機能も働いている。③疑問表現による「質問-質問」「依頼-拒絶」には、コミュニケーションの効率性が現れたということが明らかになった。

参考文献: (1) 加藤重広.2009.「動的な文脈論再考」、『北海道大学文学研究科紀要』128.195-223.

(2) 藤村逸子・大曾美恵子・大島ディヴィッド義和.2011.「会話コーパスの構築によるコミュニケーション研究」、藤村逸子・滝沢直宏編『言語研究の技法：データの収集と分析』、43-72、ひつじ書房。

## 研究発表 9 / Oral Presentations 9 (9:50~11:45) 第4室 [F311]

### 1. 会話で諷諭を使う二つの方法

平川裕己 (神戸市外国語大学院生)

本論は、(i) 会話において諷諭 (allegory) というレトリック技法が二通りの方法で実現されること、(ii) それらがいずれも会話という活動の仕組みに根ざしていること、を示す。

諷諭は話題の事柄を別の事柄に譬えて伝える技法である (佐藤, 1992: 206-207)。会話の場合、この譬えの組み立てには、(a) 話者自身が単独で行う、(b) 話し相手を巻き込みつつ行う、というふたつの方法がある。(a)は従来のレトリック研究が念頭に置いてきた、独話的な方法だ。他方(b)は、話し相手との相互行為によって成立・展開する (Sacks, et al., 1974) という会話の特性を用いて諷諭を構築する方法である。これは、目の前にやりとりの相手がいるからこそ可能となる、極めて会話的なやり方だ。会話において諷諭がふたつの実現方法をもつのは、それがまさに会話という相互行為のなかで実現されるからにほかならない。

参考文献: (1) 佐藤信夫. 1992. 『レトリック認識』 東京: 講談社.; (2) Sacks, Harvey, Emanuel A. Schegloff and Gail Jefferson. 1974. "A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation." *Language*. 50: 4, part 1, 696-735.

### 2. 《賞賛》が「マウンティング」として作用する条件

市川真未 (創価大学)

本稿は、言語形式として一見《賞賛》と判断できる用例が「マウンティング」つまり、「話者の自尊心を満たし、優位な立場に立っていることを聴者に伝える言語行為」として受け取られているものを抽出し、その特徴を「①発話目的、②言語形式、③談話展開、④聴者の受け取り方」の4つの軸をもとに提示した。Culpeper(1996)のインポライトネス理論とBrown & Levinson(1987)のポライトネス理論を用いて考察した結果、「マウンティング発話」になりうる発話には「①発話者自身の肯定的な部分に言及したり、②社会通念として優劣

が明白である事柄に言及し、比較することにより発話者の優位性を明示する」などの特徴があった。また、人間関係や過剰な賞賛、どのような肯定評価語を選択するかによっては《賞賛》が「マウンティング」に作用することもあるということも分かった。

参考文献：(1) Brown, P. & Levinson, S. 1987. *Politeness: Some Universals of Language Usage*. Cambridge. (2) Culpeper, J. 1996. "Towards an Anatomy of Impoliteness." *Journal of Pragmatics*, 25, 349-367.

### 3. 英語母語話者と日本人英語学習者の要求談話の対照分析—返金、返品・交換をめぐるロールプレイを資料として—

山本綾（昭和女子大学）

本研究では、英語母語話者と日本語を母語とする英語学習者を対象に、客としての言語行動を対照する。具体的には、商品購入後に店に戻って返金または返品・交換を求める場面のやりとりに焦点をあて、談話の構造や表現形式の特徴を探る。資料は、The NICT JLE Corpus に収録された2種類のロールプレイ（客に落ち度がない“Travel”、客に落ち度がある“Shopping”）である。

英語母語話者と日本人英語学習者では、交渉の過程で責任の所在や法的措置について言及するか、言及するとしたらどのように言及するか、という点において違いがあることがわかった。また、談話標識やフィラー、あいづちの選択にも母語話者と学習者で異なる傾向が見られた。発表では、これらの相違について事例を挙げながら検討する。

参考文献：金子朝子. 2004. 「日本人英語学習者の要求の発話の発達」、和泉絵美・内元清貴・井佐原均（編著）『日本人1200人の英語スピーキングコーパス』113-129、アルク.